児童の消費生活に関する一考察

長 屋 美穂子

The Study of Children's Consumption Living

Mihoko Nagaya

Economy of children's living should not be ignored, as adult society can not be discussed excluding economy. Children's needs for consumption become various and advanced accoding to adult living.

The present condition of children's consumption living is investigated here in comparison with the data and the surveys for twenty years.

1. Most children monthly get pocket money in spite of the times. The average amount of middle years' student of elementary school is 500 yen, and upper years' is 1,000 yen. It has not so changed during 1970' and 1980'. Children use their poket money for buying sweets, magazines or cartoon books. The price is cheap.

2. "Otoshidama", a New Years Present, is 10,000 yen on the average during 1970' and 1980'. The children who spend all "otoshidama" are very few, most children save money.

3. Children are sensitive to catching the knowledges about market-goods through advertisements of mass media and information exchanges by themselves.

1. はじめに

戦後，豊かな生活と社会をめざしていた産業は，現在に至るまで多少の変動はあったもののまずは上昇した．そしてすばらしい発展を遂げ，経済豊かな社会を築き上げ，それに伴いマスコミ情報も世界的に拡大している．

一般社会はもちろん，家庭の消費意欲はますますエスカレートし，まるでとどまることを知らないかのように，消費生活は多様化してきている．

ところで，大人社会が経済を抜きにしては考えられないのと同様に，子どもたちの生活においても経済を無視することはできないと思われる．子どもたちの消費意欲も，大人の生活に合わせて多様化し，高度化してきているようである．

現代はまさに"使い捨て時代"ともいわれているが，そこに到達するまでどのように変化して行ったであろうか，ちょっとひと昔を振り返りながら，実態調査を含めた上で，児童の消費生活の一端を述べる．

2．変　　遷

『子ども白書』（日本子どもを守る会編）は，1964年から現在まで，1966年を除いて毎年発行されている．この中から，児童の消費生活に関するものをピックアップし，銀行などの行なった調査も含めて，その歴史をたどってみる．

＜1968年＞

お小遣いにはふたつのパターンがあり，ひとつは1ヶ月に一定額を与えて，それで子どもが必要とする学習用品・雑誌・本・日用品の小物・飲食などいろいろなものに当てさせるものと，もうひとつは帰宅後の生活に必要な飲食・遊具などに使わせるものとがある．

東京都内の小学校1～6年生を対象とした調査結果によると，子どもたちは10円の日銭で1日を過ごしている．物価高だったらしく，子どもたちはお小遣いのやりくりも大変のようである．一冊100円の少年マガジンは母親に特別予算を請求するか，または父親におみやげとして予約するか，あとは生活の知恵で友人と交代に購入して輪読している状態であったらしい．

お小遣いのもらい方として，低学年は「日給型」，高学年は「月給型」で，平均すると〝月ぎめ〟で300円もらう方法が最も多く27％，次に多いのは〝不定額〟26.0％である．お年玉は1人平均2,257円で，ちなみに最高額は19,500円，最低額は0円となっている．子どもがとくに欲しい物は，5年生の場合男子はトランシーバー・天体望遠鏡など，女子はアコーディオンのようである．[1)]

＜1973年＞

1973年7月に実施された調査結果で，東京都足立区立小学校5・6年生を対象としたものである．公団・商店・都営の三地域に分けての結果であるがまとめて述べる．96％の子どもが，何らかの形式でお小遣いをもらいやりくりしている．もらっていないという子どもは，欲しい時に親が必要なものを用意してくれたり，お金を与えてくれるというやり方で，子どもは不自由はしていないようである．

毎日もらっている子どもは30～50円，週ぎめは100～300円，月ぎめは300～2,000円である．また決まった時以外にも，手伝いをした時（45％），良いことをした時（12％），テストや通信簿で良い点をとった時，などでもらっていたようだ．

残ったお金は35％の子どもが貯金をしていて，58％は自分で保管，また家族にわたす子どももいた．

お小遣いが不足した場合がまんする子どもはもちろんいるが，前がり・貯金をおろす・手伝いをしてもらう・家族からもらう，などしてお金を得ていたらしい．

お小遣いの使途は飲食物や本・学用品などの購入である．[2)]

＜1974年＞

東京都足立区立小学校5・6年生103名を対象とした調査結果である．ひとりを除いて全員が何らかの形式でお小遣いをもらっている．

お小遣いのもらい方は，月ぎめが最も多い．決まった時以外にも，親戚の人や手伝いをした時，またはボーナスの時などにもらっていたようである．

額は毎日の場合30～50円，週ぎめの場合は200円位，月ぎめの場合は1,000円位である．

〝足りない〟という子どもは8％いて，ねだってもらったり，がまんしたり，なかには貯金をおろしていて，なお残った時は貯金している．

お小遣いの使途はお菓子が圧倒的に多く，また遊びとも関連があると述べてある．[3)]

＜1976年＞

神奈川県川崎市高津区の小学校6年生を対象とした調査結果である．

お小遣いのもらい方は，月ぎめが70％で最も多く，必要な時にもらうが22％である．

親の与え方についての考えでは，お金を計画的に使う習慣づけが51％，別に深い意味はないというのが26％，その他はほうび・どこの家でも与えているから，などである．額の

決め方については，家族の話し合いの中からが51%，子どもの要求が15%，家計から割り出してが9%である．お小遣いの使途については，本人まかせが84%，小遣い帳をつけさせている者は13%である.[4)]

＜1977年＞

埼玉県浦和市の小学校4年生を対象とした調査結果である．

お小遣いのもらい方は，月ぎめが圧倒的に多く71.1%で，額は500円が多く40%，なお最高は1,500円である．

お小遣いの使途は，本・雑誌・飲食物が多く，とくに雑誌の中で週刊のマンガ本に使用していることは特徴である．

お年玉について，もらった額は1万円以下が最も多く50%，次は1万5千円以下20%，最高額は3万5千円である．使い道は圧倒的に目的のない貯金が多く81.1%，目的のある貯金は高価な物を買うため，月々のお小遣いの足しにするなどである.[5)]

＜1978年＞

この年は小学生を対象とした調査記録の記載はない．お小遣い論についてふれてみる．

お小遣いを考える時，子どもたちの〝遊び〟の問題をぬきに考えられなくなってきている．子どもの生活は急激に変化し，遊び場を失い，放課後は塾へ行くようになり，地域での遊び友だち・遊び集団がなくなり，テレビを見たり，外では駄菓子屋の軒先に並べてある子どものゲームへ足が向くようになっている．このような中で，〝お金〟に対する認識がつくられており，〝お金を使うことが遊び〟で，〝お金〟は遊びを成立させる前提条件となってしまい，お金なしでは遊べない子どもを生み出し，お金を使うことに魅了されて他の遊びに興味を失っている子どもが多くなってきているようである.[6)]

＜1981年＞

神奈川県川崎市北部の小学校4～6年生を対象とした調査結果である．

お小遣いのもらい方は月ぎめが最も多く，4年生は43%，5年生は69%，6年生は86%，である．

決まった額のお小遣いをいつからもらい始めたかという質問に対して，学年が下がるほど早い傾向がでていて，6年生では3・4年生からが多く，4年生では1年生からが多く，また幼稚園時代からもらっていた子どももいたようである．

お小遣いの額は，4年生は1ヶ月500円が多くほとんど足りていて，5年生は1,000円で足りている．6年生は1,000円で足りる・足りないの割合は半々である．

残ったお金はほとんど貯金するか，保管しておくということで，なお欲しいものを買う子どもはどの学年も17%いた．

お小遣いの使途について，6年生はマンガ・雑誌・文房具・お菓子の順で多くなっていて，学年が上がるに従ってマンガや雑誌が増え，趣味やおつき合いでの出費が多くなっている．

お小遣いのもらい方に対する要望では，くれる日と額を決めてもらいたいというのが多い．またお小遣いをもらった時に，親に対して「ありがとう」と感謝の言葉を述べる子どもは約50%ということである.[7)]

＜1985年＞

1984年に実施された調査で，京都市内の小学生1,024名を対象としたものである．

お小遣いをもらっている子どもは80%いて，3・4年生を境に月ぎめでもらう場合が多く半数に近い．

お小遣いの額は1ヶ月500～1,000円が過半数を占めている．お小遣いをもらっている子どもは，その額について約70%はちょうどよいと答えている．また男子の方が〝少ない〟と思っている子どもが多く，高価なものを買いたいと思う傾向が低学年からみられ，女子の方は高学年からその傾向がでてくるようである．

お小遣いの使途は食べ物が多い．とくに男子はプラモデルやおもちゃを買うに対して，女子はその他が多く，その使い道は文房具・小物を中心としたキャラクター商品で，誕生

会などのプレゼントをよく買っている．

おごる・おごられるという問題があり，低学年からごく普通のことにもなっていて，それが原因でケンカになり，さらに恐喝に結びついた例もあるらしい．

お年玉については99％の子どもがもらっていて，合計金額１万円台が35％を占めている．使い方はテレビゲーム・ラジコンなど普段買えないものを18％の子どもが買っていて，購入しなかった子どもの80％はほとんどが貯金をしているようである．[8)]

1985年５月に，住友銀行が東京・大阪で上場企業に勤務している子どもを持っている課長に対して行なった「子供の教育アンケート調査によると，１ヶ月のお小遣いは小学校４～６年生で900円と報告されている．[9)]

1987年４月に，東海銀行が東京・名古屋・大阪の３都市で子どものいる家庭の主婦を対象とした調査によると，小学校１～６年生の１ヶ月平均のお小遣いは750円である．また１年間のお小遣い・アルバイト収入・親戚や知人からのお小遣い・その他の収入・お年玉などを合計した総収入は４万２千円である．貯蓄している子どもは92.3％で，平均額は10万６千円，この貯蓄に対して母親の感想は〝適当な額だと思う〟が多く45.9％となっている．[10)]

ところで，東海銀行では，1988年２月にも３都市で主婦対象の調査を行なっていて，それによると，毎月お小遣いをもらっている子どもは57.4％で平均872円であると報告している．[11)]

以上が，子ども白書・銀行などの調査報告である．調査地域・対象者・内容などいろいろな条件から一貫性がないため，論議することはいささか疑問ではあるが，とくに次の視点からまとめてみる．

○お小遣いのもらい方
○お小遣いの額
○お小遣いの使途
○お年玉について
○お小遣い・お年玉など子どもに与える影響

○お小遣いのもらい方

もらい方には，毎日・週ぎめ・月ぎめ・必要な時，などの方法があるが，時代に関係なく月ぎめでもらう方法が最も多く，約20年間で大差はみられない．低学年は必要に応じてとか毎日もらう方法が多いのに対して，高学年では圧倒的に月ぎめでもらっている．

○お小遣いの額

1970・1980年代で共通していえるが，４年生の場合１ヶ月平均して約500円，５・６年生の場合約1,000円である．

銀行の報告によると１ヶ月のお小遣いは，1985年の場合４～６年生は900円，1987年の場合１～６年生は750円，1988年の場合１～６年生は872円であり，４年間で大差はないようである．

決まった時以外にも，例えば手伝いをした時・良いことをした時・学校の成績で良い点をとった時，などにももらっているが，臨時収入を加算すると多額になることが予想できる．また必要な時にもらう子どもは，決まった額をもらう子どもより使用する額が多いことも考えられる．

○お小遣いの使途

時代に関係なく，子どもが購入している物はおやつとしての食べ物が多く，次に多い物は学習用品・本・雑誌などで，金額としては安いものである．もらったお金をすべて消耗するのではなく，残ったお金は金融機関や家族に預けているようである．

表－１　お年玉の平均

学　年	1968年	1979年	1982年	1985年
1	1,591円	12,697円	16,798円	19,860円
2	1,784	13,309	18,300	19,227
3	2,246	13,760	16,105	21,059
4	2,296	14,271	17,727	21,427
5	2,517	15,105	18,521	23,016
6	3,417	16,149	19,551	23,275
平　均	2,257	14,215	17,834	21,311
指　数	1.0	6.3	7.9	9.4

1968，1985年の子ども白書から

○お年玉について

表－1から，1982年を除いて学年が上がる程お年玉の額も増加している．17年間で約10倍にも増え，お小遣いに比べてはるかに上昇している．お年玉は，親以外の大人との関係もあり，要するに社会の景気や大人のつき合いの影響を受けていることが予想される．時代に関係なく，お年玉をすべて消耗する子どもは少なく，貯金にまわしているようである．

○お小遣い・お年玉などが子どもに与える影響

現金を子どもに与えると喜こぶと思われるが，それは子どもを必ず幸わせにするとは限らない．

決められたお小遣い以外に，手伝いや良い事をした時・テストや成績が良かった時などほうびにお金をもらうケースがある．そういったことを"お金"でつることは子どもにとって望ましいことであろうか．

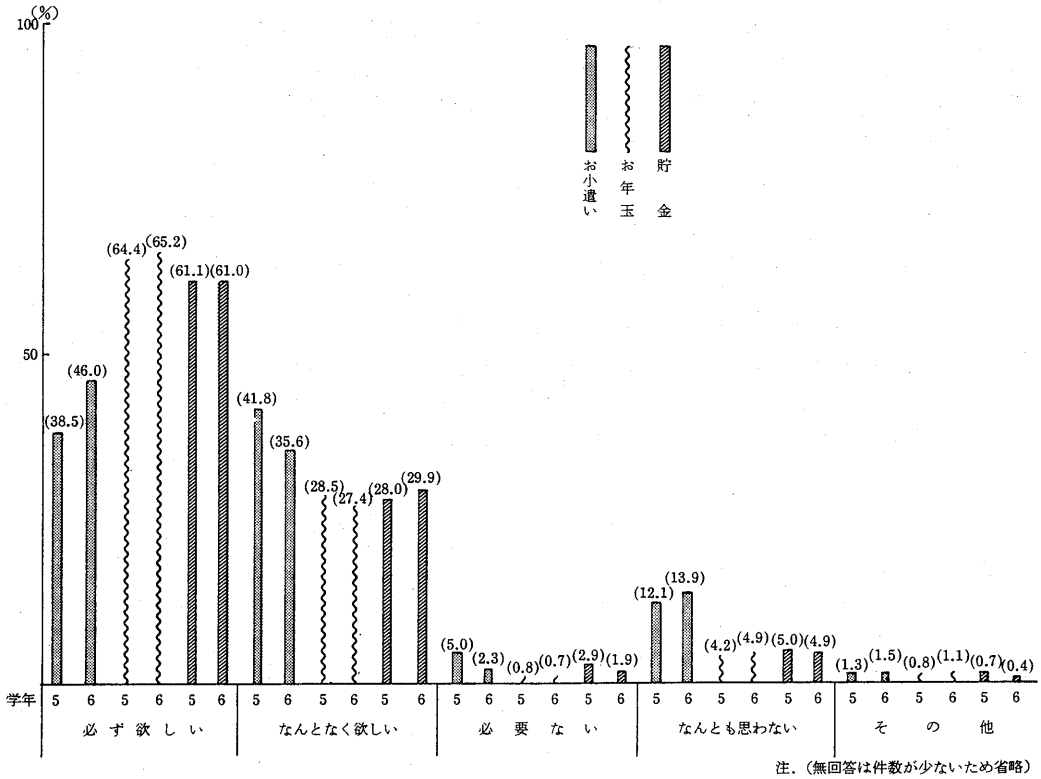
またお小遣いが不足した時，もちろんがまんする子どももいるが，なくなったからといって，再びもらうことは計画性が失われてしまうし，依存性の強い子になってしまうことも考えられる．

ところで，ゲームセンターのようにお金を使うことが遊びになっていることがある．遊び場を失なった子・他の遊びに興味を失なっている子どもがお金に魅せられてしまい，それが遊びになっているケースもみられる．

3．実　態　調　査

大人に比べて額に大小の差はあっても，手にした現金を支出したり貯蓄したりすることは，大人も子どももさほど変わらないように思われる．

実際，子どもはどんな消費生活を営んでいるのか調べてみた．



注．（無回答は件数が少ないため省略）

図－1　要　求　の　度　合

○調査方法

関東地方の小学校5・6年生506人を対象に行なったもので，その内訳は次の通りである．

5年生　男子127名　女子112名　計239名
6年生　男子144名　女子123名　計267名
計　男子271名　女子235名　計506名

調査時期は1987年7月下旬で，調査用紙を各クラス担任から児童に配布してもらい，その場で記入させ回収してもらった．

対象者の家族構成は，子ども2～3人，大人2人のケースが多い．

○結　果

お小遣い・お年玉・貯金・などに対して，児童はどの程度要求し，またその収入・支出などの実態を調べた．

1) お小遣い

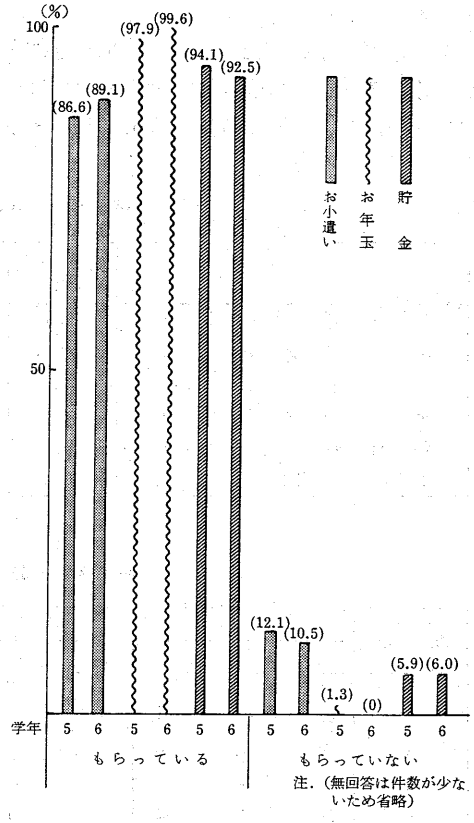
お小遣いの要求度合は，5・6年生共男子の場合〝必ず欲しい〟，女子の場合〝なんとなく欲しい〟が高率を示している．〝必ず欲しい〟の割合が高いのは5年生より6年生の方に多く，それだけ必要性を感じている．男女を問わず〝必ず欲しい〟〝なんとなく欲しい〟を合わせると，5年生は80.3%，6年生は81.6%の子どもがお小遣いを必要としていると思ってもよいだろう．(図－1)

実際にお小遣いをもらっている子どもは，5年生で86.6%，6年生は89.1%で，6年生の方が若干多い．

たいていの子どもがお小遣いをもらっていて，要求の度合より実際もらっている率の方が高い．(図－2)

もらい方の形式は〝月ぎめ〟が多く，5年生は74.3%，6年生は80.8%である．次に多いのは〝必要な時〟である．すなわちたいていの子どもは，〝月ぎめ〟の月給制である．(表－2)

もらっている額を具体的にみてみると，月ぎめの場合平均して，5年生男子は875円，



図－2　収入の有無

表－2　もらい方の方法（お小遣い）

(%)

	5年			6年		
	男	女	計	男	女	計
月ぎめ	72.3	76.7	74.3	75.9	86.2	80.8
ほしい時	9.8	9.5	9.7	10.0	8.3	9.2
週ごと	8.0	5.3	6.8	7.8	0.9	4.6
その他	3.6	5.3	4.3	4.7	4.6	4.6
毎日	3.6	2.1	2.9	0.8	0	0.4
十日ごと	0.9	1.1	1.0	0	0	0
無回答	1.8	0	1.0	0.8	0	0.4

女子は848円で，6年生男子は1,032円，女子は929円である．5年生より6年生，女子より男子の方が多くもらっている．ちなみに1ケ月の最高額は，5年生は10,000円，6年生は4,000円である．

お小遣いは誰からもらうかの問いに対して，半数以上が〝母〟からもらっていて，次に多いのは〝父または母のいずれから〟にもらっている．

ところで，手にしたお小遣いで毎日品物を買い求める子どもは少ない．最も多いのは，〝時々何かを買う〟で5年生は52.2%，6年生は70.2%である．なおすぐに使用しないで〝あまり買わない〟〝貯金する〟のは，5年生38.2%，6年生25.2%である．（表－3）

いったいどのような品物を購入しているのか，とくに多いものを具体的に1人3点あげてもらった．表－4からみて，文房具・食べ物など日常的なものに支出している子どもが多い．とくに女子は，友人への誕生日などのプレゼント購入が目立つ．その他としてあげられたものは，ファミコンのカセット・レコード・ビデオレンタルなどである．

どのような方法であれ，お小遣いをもらっ

表－3　支出の方法（お小遣い）

（%）

	5年			6年		
	男	女	計	男	女	計
時々何かを買う	50.8	53.7	52.2	71.3	68.8	70.2
あまり買わない	17.9	28.4	22.7	12.4	17.4	14.7
貯金する	18.7	11.6	15.5	10.9	10.1	10.5
その他	5.4	4.2	4.8	2.3	3.7	2.9
毎日何かを買う	5.4	2.1	3.9	2.3	0	1.3
無回答	1.8	0	0.9	0.8	0	0.4

表－4　お小遣いで購入した品物

順位	5年		6年	
	男	女	男	女
1	マンガ	文房具	食べ物	文房具
2	食べ物	食べ物	マンガ	マンガ
3	文房具	本	本	本
4	本	マンガ	文房具	食べ物
5	飲み物	プレゼント	飲み物	プレゼント
6	プラモデル	飲み物	おもちゃ	飲み物
7	おもちゃ	ハンカチ・アクセサリー	プラモデル	ハンカチ・アクセサリー

（以下省略）

表－5　満足の度合い（お小遣い）

（%）

	5年			6年		
	男	女	計	男	女	計
満足している	56.3	53.7	55.1	38.8	40.4	39.5
だいたい満足している	23.2	24.2	23.7	33.3	42.1	37.4
わからない	9.8	13.7	11.6	11.6	8.3	10.1
満足していない	9.8	6.3	8.2	14.7	9.2	12.2
無回答	0.9	2.1	1.4	1.6	0	0.8

ている子どもに対して，現在もらっている金額について満足の度合を調べてみた．5年生は55.1%，6年生は39.5%が〝満足している〟で，学年差が大きい．とくに6年生男子は他の子どもより不満足の割合が高い．（表－5）では〝満足していない〟子どもにその理由を聞いたところ，ほとんどが額の少なさをあげていて，その他としては友人や兄姉との額の差に対する不満・気にいった物が購入できないなどである．なお〝満足している〟子どもがもらっている額は1ヶ月平均して，5年生は1,013円，6年生は1,125円である．逆に〝満足していない〟子どもがもらっている額は1ヶ月平均して，5年生は607円，6年生は937円である．満足・不満足の差は5年生の場合約400円，6年生の場合は約200円ということになる．ちなみに㈱住友銀行，1987年の調査によると，小学校4～6年生の場合，〝足りない〟と答えた子どもの希望額は1,850円で，現実との差額は820円という報告がある．[12)]

お小遣いに対して，約80%の子どもが要求しているが，実際の使用率は，5年生56.1%，6年生71.5%である．手にした現金をすべて使用することはなく，他にも何か目的があるように思われる．

2) お 年 玉

お年玉の要求度合については，学年・男女を問わず〝必ず欲しい〟率が高く，5年生は64.4%，6年生は65.2%である．なおお小遣いより要求の度合が高い．（図－1）

実際に，1987年のお正月にお年玉をもらったかどうかについて調べてみると，対象者のほとんどがもらっていて，もらっていないのは506人中5年生に3名いた．（図－2）

一人当りのもらった額について調べてみると，最も多いのは10,000～15,000円で，5年生は20.5%，6年生は21.5%である．次に多いのは5年生は5,000～10,000円で13.7%，6年生は20,000～25,000円で15.1%となっていて，6年生の方が高額である．3番目に多いのは，5・6年生共30,000円台である．なお最高額は，5年生で75,800円，6年生は79,000円である．（表－6）

もらった額について感想を聞いてみた．項目中5年生が最も多く選んだものは，〝予想より多い〟で47%，6年生は〝予想通り〟が

表－6　お 年 玉 の 額

5年				6年			
順位	男	順位	女	順位	男	順位	女
1	1万～1万5千円未満	1	1万～1万5千円未満	1	1万～1万5千円未満	1	1万～1万5千円未満
2	3万～4万円 〃	2	5千～1万円 〃	2	2万～2万5千円 〃	2	2万～2万5千円 〃
3	1万5千～2万円 〃	3	1万5千～2万円 〃	3	3万～4万円 〃	3	1万5千～2万円 〃
4	5千～1万円 〃	4	2万～2万5千円 〃	4	1万5千～2万円 〃		3万～4万円 〃
5	5千円 〃	5	4万～5万円 〃	5	5千～1万円 〃	5	5千円～1万円 〃
	2万～2万5千円 〃						2万5千～3万円 〃
	2万5千～3万円 〃						

（以下省略）

表－7　もらった額についての感想（お年玉）

（%）

	5年			6年		
	男	女	計	男	女	計
予想より多い	42.3	52.3	47.0	37.8	39.8	38.7
予想通り	33.3	32.4	32.9	37.8	41.5	39.5
予想より少ない	14.6	7.2	11.1	20.2	14.6	17.7
無回答	9.8	8.1	9.0	4.2	4.1	4.1

多く39.5%である．なお6年生の男子は，"予想より少ない"の割合が高く，多額なお年玉を夢みていたようである．(表－7)

お年玉をもらった人をすべてあげてもらったところ，1親戚の人，2祖母，3父親，4母親，5祖父の順で多く，その他として近所の人などをあげている．

ところで，もらったお年玉はどのようにしているだろうか．項目中最も多く選んだものは，学年・男女を問わず，"買物をし，まだ残っている"で，それに"全額残っていて，買い物の予定はない""貯金した"を合わせると，5年生は76.3%，6年生は74.4%である．お小遣いと比較すると多額なので貯金にまわすのであろう．(表－8)

お年玉でどんなものを購入したか，あるいは購入予定の品物について，具体的にあげてもらった．多い順に列挙すると表－9のようになる．購入内容が男女により異なっていて，またお小遣いとお年玉では額に差があるように，使い道も異なっている．お小遣いの場合は，食べ物・文房具などの日常必需品に使っていて，お年玉の場合は，日常必需品はもとより，多少高価な品物を購入するほか貯金にもまわす割合が高い．

お年玉の要求度合は，全体的にみて高いが，使用方法によると，項目中"全額残っていて，買物の予定はない"を選んだのは5年生で19.3%，6年生は12.8%いる．目的は品物購入はもちろん，蓄えの方も考えているように思われる．

3) 貯　　金

貯金の必要性について，5・6年生共"必ずあった方がよい"を61%の子どもが選んで

表－8　使用方法（お年玉）

(%)

	5年			6年		
	男	女	計	男	女	計
買物をし、まだ残っている	35.7	29.7	32.9	57.3	37.4	48.1
貯金した	18.9	30.0	24.1	8.8	17.9	13.5
全額残っていて，買物の予定はない	16.3	22.5	19.3	7.7	18.7	12.8
その他	8.7	8.8	8.8	8.0	12.2	9.4
買物をし，残っていない	9.8	3.6	6.8	11.9	8.1	10.2
買物の予定がある	9.8	3.6	6.8	6.3	4.9	5.6
無回答	0.8	1.8	1.3	0	0.8	0.4

表－9　お年玉で購入した品物

順位	5年		6年	
	男	女	男	女
1	ファミコン	文房具	ファミコン	文房具
2	マンガ	本	本	本
3	本	マンガ	マンガ	食べ物
4	スポーツ用品	食べ物	スポーツ用品	プレゼント
5	食べ物	プレゼント	プラモデル	マンガ
6	おもちゃ	おもちゃ	おもちゃ	飲み物
7	プラモデル	その他	食べ物	その他
8	文房具	ハンカチ・アクセサリー	飲み物	ハンカチ・アクセサリー
9	飲み物	飲み物	文房具	スポーツ用品
10	切手・コイン	自転車	ラジコン	ファミコン

(以下省略)

表－10　貯　　金　　額

5			年	6			年
順位	男	順位	女	順位	男	順位	女
1	1万円未満	1	10～15万円	1	10～15万円	1	10～15万円
2	2万円台	2	1万円未満	2	1万円台	2	2万円台
	10～15万円	3	15～20万円	3	1万円未満	3	3万円台
3	20～30万円	4	2万円台	4	30万円以上	4	1万円台
4	3万円台		3万円台	5	4万円台		30万円以上
5	6万円台		4万円台	6	2万円台	5	1万円未満
6	1万円台		7万円台		5万円台		4万円台
7	4万円台	5	5万円台		7万円台	6	6万円台
	5万円台		8万円台		8万円台		7万円台
8	30万円以上		9万円台		20～30万円		20～30万円

（以下省略）

表－11　保管場所（貯金）

（%）

	5		年	6		年
	男	女	計	男	女	計
金融機関に預けていて，通帳は家族がもっている	69.6	83.2	76.1	73.7	78.9	76.2
金融機関に預けていて，通帳は自分でもっている	13.6	9.3	11.6	15.0	9.6	12.6
現金は自分で保管している	5.9	2.8	4.4	3.8	4.4	4.0
現金は家族が保管している	6.8	0.9	4.0	3.0	5.3	4.0
わからない	2.5	1.9	2.2	3.0	0.9	2.0
その他	0.8	1.9	1.3	1.5	0.9	1.2
無回答	0.8	0	0.4	0	0	0

いる．"なんとなくあった方がよい"を合わせると，5年生は89.1%，6年生は90.9%で高率を示し，お小遣いより，貯金の方の要求度合が約10%高い．（図－1）

ところで，現在の貯金の有無については，5・6年生共"ある"と答えている子どもが多く，5年生は94.1%，6年生は92.5%で高率を示している．なお要求の度合より，実際，貯金のある人の方が若干多い．（図－2）

貯金額について具体的にあげたものを，多い順に表－10に列挙する．全体的にみて，10～15万円が多い．ちなみに東海銀行が同年4月に行った調査によると，小学生の貯蓄額は平均10万6千円で，62.6%が10万円未満となっている．これに関して，母親の感想は「適当な額だと思う」…45.9%，「少ないと思う」…27.6%，「たくさん持っている」…26.5%で，大人からみて，10万円くらいが妥当な額のようである．

これらの現金の保管方法として最も多いのは，"銀行や郵便局などに預けていて，通帳は家の人が持っている"という状態である．なお"銀行や郵便局などに預けていて，通帳は本人が持っている"を合わせると，5年生は87.7%，6年生は88.8%で高率を示し，要するに現金の保管は，金融機関を頼っているようである．（表－11）

何故，金融機関に預ける子どもが多いのか，その理由を調べてみた．多い理由として"家族の勧めで預けている"であり，その他とし

て多くあげられたものは，安心である．将来のために貯金する・持っていると使いたくなるので貯金する．などである．述べられた理由からの推測であるが，子どもの意志というより，親の考え方がそのまま子どもへ反映したように思われる．(表－12)

現金は金融機関に預けている子どもが多いが，その現金の出し入れを行っているのは，約半数が母親である．子ども自身が金融機関に行って，現金の出し入れをするのは，5年生で4.9%，6年生で9.3%いて，高学年の方が若干多い．子どもが自由に出入りできる場所ではないようである．

全体的にみて93.3%の子どもが貯金しているが，その目的として最も多いのは，5・6年生共，〝将来のため貯金している〟で5年生は54.2%，6年生は49.8%で，次に多いのは〝なんとなく貯金している〟という状態である．(表－13)

子どもはもらった現金を買物や娯楽などに

表－12　金融機関を利用する理由（貯金）

(%)

	5年			6年		
	男	女	計	男	女	計
家族の勧めで預けている	33.8	44.8	39.1	44.4	36.9	40.9
利息がつくので預けている	20.3	12.1	16.4	19.5	17.5	18.6
なんとなく預けている	15.3	15.0	15.1	17.3	15.8	16.6
その他	15.3	20.6	17.8	8.3	17.5	12.6
無回答	15.3	7.5	11.6	10.5	12.3	11.3

表－13　貯金の目的

(%)

	5年			6年		
	男	女	計	男	女	計
将来のため貯金している	51.7	57.0	54.2	47.3	52.7	49.8
なんとなく貯金している	30.5	35.5	32.9	37.6	37.7	37.7
買物の予定がある	8.5	4.7	6.7	11.3	6.1	8.9
旅行の予定がある	4.2	1.9	3.1	2.3	2.6	2.4
無回答	5.1	0.9	3.1	1.5	0.9	1.2

表－14　貯金などで購入した品物

順位	5年		6年	
	男	女	男	女
1	ファミコン	シャープペンシル	ファミコン	シャープペンシル
2	シャープペンシル	ぬいぐるみ	シャープペンシル	ぬいぐるみ
3	野球の道具	レコード	野球の道具	うで時計
4	サッカーボール	うで時計	サッカーボール	レコード
5	うで時計	ローラースケート	ラジコン	ファミコン
6	ラジコン	オルゴール	うで時計	自転車
7	つりの道具	ペット	つりの道具	バレーボール
8	百科事典	バレーボール	自転車	ローラースケート
9	ローラースケート	自転車	百科事典	ラジカセ
10	自転車	ファミコン	ラジカセ	オルゴール

(以下省略)

すべて使用することは少なく，子どもの頭の中に「貯金」という言葉がしっかりとうえつけられているようである．

4) 消費意識

今までに，子ども自身が蓄えたお金で購入した品物を上位10番まで列挙した．(表－14)

購入した品物からみて，男女の趣味が明らかに異なっている．男子がその他として述べたものの中で多い品物は，文房具・本などである．

子どもが蓄えたお金で買物をする時，誰かに相談しているだろうか．項目中，〝必ず家族に相談する〟が多く，5年生は67%，6年生は50.5%である．逆に〝ほとんど誰にも相談しない〟〝全々誰にも相談しない〟は5年生の場合7.5%，6年生の場合14.6%である．6年生の方が自立性が高まっていて，これは親離れの兆候のように思われる．(表－15)

実際に自分のお金で買物をして，今までに家族から注意されたり，おこられたりしたことのある子どもは，5年生の場合22.2%，6年生の場合35.6%いる．5年生より6年生，女子より男子の方が注意されたりおこられる割合が高い．その理由を多い順にまとめると，①むだ使い（買いすぎ・不必要な品物を買う）に関する内容のもの，②相談しないで購入した．などである．その他としてあげられたものは，件数としては少ないが，現金を他人に貸してはいけない・食品の悪さやその危険性の指摘・品物を買うと中高校生にとられるから買ってはいけない・将来のことを考えて貯蓄すべき，などである．

子どもは自分で蓄えたお金で欲しい品物を購入する時，どのような気持ちになるのであろうか．最も多く選んだものは〝品物を買うことは嬉しいが，お金が減るのが残念に思う〟で，5年生は56.0%，6年生は61.1%を示し，現代っ子は堅実である．なお5年生より6年生，女子より男子の方が若干多い．望んでいた品物が手に入り，単純に〝嬉しい〟と思う子どもは，全体的にみても24.4%で少なく，欲しい品物を自分のお金で買うことに対しては，感動が薄いように思われる．(表－16)

ところで，もしたくさんのお小遣いや貯金などがあり，何を買ってもよいとしたら，いったい何が欲しいか，希望の品物をひとつあげてもらった．その上位を表－17に示す．5・6年生共最も多く述べたものは「家」である．一般家庭の現実問題のひとつとして，住宅・土地などが大きな問題となっているが，そのような事情が自然に子どもにも影響を与え，子ども自身の問題として発展し，要するに世相の反映のように思われる．なお件数は少ないが，地球・命・世界・日本列島・ロケット・自然・世界の学校・城・などをあげていて夢を求める子どももいる．それは5年生より6年生の方が多くあげている．

〝何もいらない〟という子どもが対象者506人中119人（24%）いる．満足しているのか，無関心なのか，この調査からは資料不足

表－15　買物をする時の相談について

(%)

	5年			6年		
	男	女	計	男	女	計
必ず家族に相談する	62.3	72.3	67.0	53.4	47.2	50.5
時々家族に相談する	17.3	16.0	16.8	18.1	30.9	24.0
ほとんど誰にも相談しない	4.7	4.5	4.6	10.4	12.2	11.2
その他	3.9	1.8	2.9	6.9	4.9	6.0
全々誰にも相談しない	4.7	0.9	2.9	4.9	1.6	3.4
時々友人に相談する	1.6	0	0.8	2.8	0.8	1.9
必ず友人に相談する	0.8	0.9	0.8	2.1	0.8	1.5
無回答	4.7	3.6	4.2	1.4	1.6	1.5

表－16　品物を購入する時の気持ち

(%)

	5年			6年		
	男	女	計	男	女	計
品物を買うことはうれしいが，お金が減るのが残念に思う	58.3	53.6	56.0	63.2	58.6	61.1
うれしい	23.6	27.7	25.5	19.4	27.6	23.2
何も思わない	9.4	7.1	8.4	7.6	7.3	7.5
自分のお金が減るので，買いたくないと思う	5.5	8.0	6.7	4.9	4.1	4.5
その他	1.6	1.8	1.7	3.5	0.8	2.2
無回答	1.6	1.8	1.7	1.4	1.6	1.5

表－17　一番欲しい物

順位	5年	順位	6年
1	家	1	家
	ファミコン	2	パソコン
2	ベッド		カセット
3	ファミコンのカセット		ベッド
4	自転車		テレビ
5	服		服
6	レコード	3	本
	パソコン		自転車
7	文房具		ファミコン
	ぬいぐるみ	4	土地

(以下省略)

のためこれを判定することはできない．

以上，お小遣い・お年玉・貯金の要求度合からみて，"必ず欲しい"の割合の高いものはお年玉で，年始に期待しているようである．親や周囲の大人も要求に応じていて，ほとんどの子どもがもらっている．収入源の中で，お小遣いに対する要求が低いのは，お年玉や貯金などの蓄えがあり，お小遣いの必要性をあまり感じていないことが考えられる．

お小遣いとお年玉では使用方法に差があり，お小遣いは飲食やマンガ・雑誌などの日常的なものへの消費が多い．一方，お年玉はもらった額すべてを消費したのは，5年生の場合6.8%，6年生の場合10.2%で，それ以外の大半の子どもは買物をして残りは銀行や郵便局などの金融機関に預けている．貯金する目的として，将来のために役立たせたいなどの理由があげられることから，現代っ子の一面をみることができたように思われる．また女子より男子の方が収入源に対する要求度合や消費率が若干高いのは，購入内容からみて，高価なものを求めたいためだと予想できる．

欲しいものはたいてい手に入るといわれている時代で，生活している現代っ子の購入内容に注目してみる．購入したものの上位を示しているものはファミコン，また要求しているものもファミコンで，調査対象の子どもたちはファミコン・ブームであるが，一般社会においても，このところファミコンが大流行している．その人気の理由として，外で遊ぶ場所に恵まれなかったり，塾やおけいこごとで遊ぶ時間がなかったりして，自由時間が少ない状態なので，どうしても室内遊びになることが推察される．画面をひたすら見つめ，指先を動かすだけが遊びとは，誰が考えても不健康にちがいない．ハイテクおもちゃは室内遊びで，しかもひとりでも楽しめる為，なお一層子どもをとじ込めてしまうように思われる．

4．総　　括

家庭の事情で家計を助けるための労働を必要とする場合は別にして，低年令の子どもは自分で稼ぐことはできない．そのため親や周囲の大人から受ける決められたお小遣い・手伝いや何か良いことをした時や学校の成績が良かった後のほうび・お年玉・などが収入源である．

主な収入源としての決められたお小遣いは，"月ぎめ"でもらう方法が多く，小学校中学年では約500円，同じく高学年では約1,000円である．使途は，お小遣いの場合は，飲食物や雑誌などの日常必需品，お年玉の場合は，日常購入できない高価な物を購入し残りは貯金にまわしている．約20年間この傾向である．

お小遣いやお年玉などは，与える側の考え方により，子どもへ多方面から影響を与えることもわかった．

ところで，近年，子ども向けの商品を扱う販売店が増加し，品物も日移りする程の過剰さである．さまざまな業界は，次から次へと子どもの気を引く製品開発に努力し，それらを新聞のチラシや子ども用の雑誌などで広告したり，またテレビでは子ども向けの番組を放映する時間帯に宣伝し，明らかに関心を引いている．それらの業界が子どものために生産し販売することは，消費者としての子どもの立場を重んじているということがうかがえる．実際問題として，食料品ひとつにしても，子ども向けの人気の高いアニメ・ドラマなどのキャラクター入りの包装をしたり，また衣料品についてはやはりそれらをプリントしたりした商品が氾濫している状態である．

子どもは商品そのものの価値や質などを選択する知識は乏しい．時代の波にのせられ，商品化された品物に支配されないように，個々において，自らが本当に必要とする商品に目を向けられるよう，親や周囲の大人が指導してあげるべきだと思われる．

〔付　記〕

調査に御協力下さいました教育委員会・小学校の教職員ならびに児童のみなさんに御礼申し上げます．

引用・参考文献

1）日本子どもを守る会編，子ども白書，草土文化，1968
2）〃　〃　〃　1973
3）〃　〃　〃　1974
4）〃　〃　〃　1976
5）〃　〃　〃　1977
6）〃　〃　〃　1978
7）〃　〃　〃　1981
8）〃　〃　〃　1985
9）「子供の教育アンケート調査」㈱住友銀行，1985
10）「現代っ子の持ち物と貯蓄」東海銀行，1987
11）「子どもの教育費」東海銀行，1988
12）「小・中・高校生のおこづかい」㈱住友銀行，1987
13）磯貝芳郎編，子どもの社会心理　Ⅲ　社会，金子書房，1982
14）指定都市教育研究所連盟編，現代の子どもの意識と行動，東洋館出版社，1979
15）ＮＨＫ世論調査部，いま小学生の世界は，日本放送出版協会，1985
16）教育基礎情報調査会，教育アンケート収録年鑑　1986版，主婦の科学社，1985
17）教育情報センター調査室，モノグラフ小学生ナウ　Vol　1−6，㈱福武書店，1981